『ひょうご歴史研究室紀要』第九号の刊行にあたって

思い返せば九年前の平成二七年度にひょうご歴史研究室がスタートし、三つの研究班が立ち上がりました。その内、『播磨国風土記』研究班と赤松氏と山城研究班については、それなりのイメージがありました。しかし、たたら製鉄については、ほぼ空白といっていい状態でした。兵庫でたたら？という程度のわたしの認識にわずかな手掛かりを与えてくれたのは、館長就任以前の大学教授時代の卒業論文でした。ある年のこと、毎年恒例の卒業論文で一人のゼミ生が「たたら製鉄」を選び、その理由として、出身地である兵庫県宍粟市には、県史跡として指定されている天児屋鉄山跡があると話したのです。指定が平成一四年（二〇〇二）のことですから、彼との会話は、その後のことでしょう。関心を惹かれたわたしは、夏休みに帰省する彼に、現地に行き、資料を集めてくるように勧めましたが、実際にたたらの里学習館に行き、同館発行のパンフレットを持参して、秋に再び現れました。それが、わたしのたたら製鉄開眼といえるでしょう。

その後、「たたら製鉄」研究班が立ち上がることで千種町西河内の天児屋鉄山跡に出向き、天児屋たたら公園に身を置きました。学習館で展示されている復元模型も見せて頂き、たたら製鉄のイメージを得ることができました。「目から鱗」という衝撃で、たたら製鉄研究という課題が、その時、理解できたように思えました。しかしその後、一宮町安積山遺跡に案内され、天児屋鉄山跡が江戸時代になって到達した製鉄技術の進化の結果であることを知るようになったのです。ゆるい傾斜の天児屋に比べると安積山は、急な傾斜三段にわたって削り出された平坦面に、一〇を超える製鉄炉跡が築かれ、出土遺物から古代末から中世移行期にかけての大型製鉄遺跡であることを教えられたからです。その意味でたたら製鉄班の主題は、製鉄技術の進化を製鉄遺跡の考古学的知見をもとに明らかにすることだと知りました。

あわせて、たたら製鉄研究の先進地である島根県古代文化センターとの連携（その後、岡山県教育委員会と大阪府交野市教育委員会との間にも拡大）がいかに重要か、理解できるようになりました。

第二の開眼は、文献資料の登場です。しかも、足元の兵庫県立歴史博物館蔵資料からのたたら製鉄史料の相次ぐ出現です。第一のそれは表題に「鉄山一件」とあり、遅れて発見された第二のそれは「勤方覚帳」とあります、両方とも「播磨国宍粟郡安積村・須加村文書」と名付けられた資料群に属するもの

で、平成七（一九九五）年に購入された一六点の内の二点です。

こうして足元から、江戸時代の中期、一八世紀後半から幕末に至る宍粟郡内たたら製鉄の実情を語る史料が確認されたのですが、その発見は、ひょうご歴史研究室が、開館四〇周年を迎えた兵庫県立歴史博物館内に設置されたことに起因します。

第二の開眼は、さらに第三の開眼を呼びました。なぜなら「勤方覚帳」は、年次が異なるとは言え同種のモノを、宇野正碇氏が先に『近世千草鉄山史料』（一九七〇）に収録されていたからです。それは先人たちの業績を検証し、継承するという課題があることを教えました。継承は、資料を通じた研究という形で行われましたが、宍粟市千種町では、平成九年（一九九七）度から地元中学生によってたたら製鉄体験学習が取り組まれています。それは「たたら製鉄という伝統技術や先人の知恵に触れることで、地域に誇りと愛着を持つ貴重な機会となっている」と、当時の西岡章寿教育長が記しています（紀要第三号）。

たたら製鉄研究班の九年は、こうした三つの開眼を生み出した歳月といえるのではないかとわたしは理解しています。その間、成果物として平成三〇（二〇一八）年に紀要第三号「特集　播磨のたたら製鉄」（二〇一八年）が編まれ、さらに令和二（二〇二〇）年には紀要別冊として『近世播磨のたたら製鉄史料集』が公刊されるに至っています。そしてこの度、紀要第九号が発刊されますが、これを以てたたら製鉄研究班は解散となります。ひょうご歴史研究室に対する予算の削減によって、『播磨国風土記』研究班、赤松氏と山城班についで、たたら製鉄研究班も終了を迎えることになったことをお伝えしなければなりません。と同時に、これまでの成果が生かされる形で令和六年秋に、特別展「ひょうご鉄ものがたり」が開催される予定であることもお知らせいたします。特別展に合わせて本研究班の協力を得て、ガイドブック『たたら製鉄入門解説書』が刊行されることとなっていますので、ご期待ください。

最後になりますが、長年にわたりたたら製鉄研究班の活動を支えて頂いたすべての研究員・協力者に対し、深甚なる謝意を表します。ありがとうございました。

令和六年（二〇二四）三月

兵庫県立歴史博物館長兼ひょうご歴史研究室長
藪　田　　貫